

見えないものを見る力をやしなう

ちかもりのたかあき
近森高明

文学部社会学専攻 准教授

開講から4年目を迎えた都市社会学と文化社会学をテーマとする研究会。36名の個性のごった煮が「社会的なまなざし」をやしなう絶好の場になる。

「都市」と「文化」から社会を考えようとする主題だったら、ほぼ何でもありの研究会です。過去の卒論テーマとしては、住宅地コミュニティと世代間交流、お台場のイメージ変容、公共空間とアート、新宿ゴールデン街等々、都市空間をめぐるテーマ群から、料理番組、「女子会」ブーム、テーマレストラン等々、日常的な文化にまつわるテーマ群まで、硬軟とり混ぜて、幅広い事象が扱われています。

ただしこれらのテーマ群は、見たところばらばらに見えますが、その読み解きには、一定の視座が必要になります。あるいは逆に、そのような視座から有意義に見えるテーマこそが、卒論のテーマとして選択されます。その視座とは「社会的なまなざし」なのですが、しかしそれがどのようなものかは、一言ではなかなか言い表しにくいところでは、あえて言えば、ちょうど文化人類学者が、調査対象となる社会の（一見すると）奇妙な風習の謎を解こうとするように、自分が埋め込まれ

ている社会の「常識」の不思議さを、不思議さとして感受しつつ、そこに隠れたしくみを読み解こうとする態度、とでも言えるでしょうか。

そんな社会的なまなざしは、一朝一夕には身につきません。それをやしなううえで重視しているのは、3、4年生合同でのグループ・ディスカッションです。研究会では、担当者が研究報告をすると、2つ〜3つのトピックを設定し、少人数のグループに分かれてディスカッションを行います。冗談もまじえつつワイワイと議論を交わすなかで、ときおり目の覚めるような意見がポンと出て、みんなの視界を一挙に広げてくれたりもする——そんなディスカッションをくり返すうち、何が社会的に面白いポイントなのか、がだんだんわかってきます。

社会的なまなざしを伝授する場として、さまざまな個性が集うゼミでの「半学半教」のディスカッションは、何よりも有効だと考えています。

「当たり前」を問う

もり ゆうと
森 優斗君 法学部政治学科3年

世間のはやりや、普段誰も気にしないくらい「当たり前」となっている物事を突き詰めていく学問こそ私たちが研究している社会学です。近森ゼミではその中でも文化や都市における「当たり前」を主に扱っています。そのため分かりやすい研究内容が多く、毎回の授業で行われるゼミ生の研究発表を踏まえたグループ・ディスカッションでは、いつも白熱した議論が行われます。面白半分で言ったはずが実は核心を突いていた、なんてことも少なくありません。面白半分で言ったはずが実は全く面白くなかった、なんてことも少なくありません。このような自由な雰囲気の中で近森先生のご指導のもと、研究に励んでいます。



最先端の外科技術で生命の根幹(心臓・血管)を守る

志水秀行

医学部 教授

心臓血管外科―薬での治療が困難な心臓・血管病変に対し確実な手技と最先端の技術で治療を行い、同時に、質の高い後進の育成を目指す専門医集団です。

心臓血管外科は、先天性心疾患、後天性心疾患(心臓弁膜症、冠動脈疾患)、大血管疾患(大動脈瘤、大動脈解離)などに対し、手術を基本とした治療を行っています。手術中、心臓や血管にメスを入れてから縫合を終えるまでの間は、出血を制御するために血流を遮断することが不可欠です。一方、長時間の血流遮断は臓器障害を引き起こすため、私たちは短時間のうちに確実な縫合を行う訓練を繰り返し、また、血流遮断中の臓器保護に関する基礎研究や術式の開発を行っています。

最近では、従来型の外科手術から低侵襲治療(できる限り患者さんの身体への影響を減らした治療法)へのパラダイムシフトが進行しています。非常に小さな切開で行う心臓手術(MICS)、人工心臓や体幹部の切開を伴わない大動脈ステントグラフト治療、外科手術と血管内治療を融合したハイブリッド治療、経カテーテル大動脈弁置換術(TAVR)など、最先端の医療に積極的に取り組んでいます。今後は

カテーテル技術を軸とした低侵襲治療への流れがさらに加速し、心臓血管外科が単科として大手術を行う時代から、「ハートチーム」の一員として低侵襲治療を行う時代へ移行していきます。その中で、安全性の確保と高い根治性を達成するために、より高度な外科技術や緊急対応力が、一層求められる時代になっていくと考えられます。ハートチームとは、心臓血管系の治療において、医師、看護師、臨床工学技士などが既存の枠組みを越えて幅広く結集し、専門的な知識や技術を持ち寄って最高の医療を提供するという概念です。私たちは、最高レベルの技術を持つ心臓血管外科医をしっかり育成し、慶應義塾大学病院の高い総合力を生かして「匠の技」と「最新の医療技術」とを融合させ、安全で質の高い新たな治療体系を確立したいと思っています。チーム作りは義塾で教育を受けたわれわれの最も得意とするところであり、最高のチーム医療を実践することこそ義塾らしい医療の形だと確信しています。

チームワークと半学半教

ひらの あきのり

平野暁教君 医学研究科博士課程4年

私たちの教室は、臨床では低侵襲治療、研究では再生医療・先端治療機器開発における大型動物を用いた橋渡し研究(実用化につなげることを目的とする医学研究の一領域)を特色としています。教育に関しては、通常の病院実習だけでなく、基礎的な手術手技のトレーニングや学会発表の機会が提供され、これまで2名の学生が優秀演題の表彰を受けています。また、看護師などメディカルスタッフとも互いに教え合いながら日常的に教育が行われていて、それによって日々チームが洗練されています。新しい治療の成功に必要な不可欠な良い連携は、心臓血管外科流の半学半教精神に養われているのだと実感しています。

